

戦後日本のメディア文化と「戦争の語り」の変容

福間良明（立命館大学）

「わだつみ」の大ヒット

1949年、戦没学徒遺稿集『きけわだつみのこえ』（東京大学協同組合出版部）が刊行された。戦死した大学生・旧制専門学校生 75名の日記・書簡等を抜粋して編纂されたものなので、小説のようなストーリーがあるわけではない。にもかかわらず、この書物は1950年の年間ベストセラー第4位になる大ヒットを記録した。

この遺稿集の基調にあったのは、「戦争遂行への反感」だった。哲学や自由主義に惹かれ、学問への思い入れが強かったにもかかわらず、意に沿わない戦争に駆り出されなければならない。こうした「反戦」への共感が、この遺稿集の記録的な売れ行きを支えていた。東京裁判などを通して、すでに旧日本軍の組織病理や戦地での蛮行は広く知られていた。何より、「聖戦」の美名を語りながら、国民の生活や言動を圧迫し、完膚なきまでの敗戦を招いた軍部への怨嗟の念は大きかった。こうした「戦争批判」「反戦」の広がりから、この遺稿集に涙する多くの読者を生み出していた。

1950年には、この遺稿集をもとに映画『日本戦歿学生の手記 きけ、わだつみの声』が製作された。「悪虐非道な職業軍人」対「理性的で反戦志向の学徒兵」という対立図式を基調としたこの映画は、原作同様、大ヒットを記録し、経営難に陥っていた映画会社（東横映画）が、このおかげで息を吹き返すことができた。

だが、この映画・遺稿集が国民的な共感を得たことは、考えてみれば奇妙なことではある。昭和初期の高等教育（大学・旧制高校・旧制専門学校等）への進学率は、世代人口の3パーセント程度でしかなかった。同書に手記を収められた戦没学徒たちは、社会的にごく限られた学歴エリートであり、一般国民とは明らかに異なる存在だった。にもかかわらず、なぜ「わだつみ」に多くの日本国民は涙したのか。

そこには「教養」への憧れがあった。大正期（1912～1926）から1960年代にかけて、大学・旧制高等学校では、教養主義が広がりを見せていた。エリートであるからには、哲学・思想・文学・歴史などの古典に親しみ、人格を陶冶しなければならないという規範文化である。だが、それは必ずしも学歴エリートに閉じるものではなかった。ことに戦後の初期には、義務教育より上に進むことができなかった勤労青年たちのあいだでも、その悔しさを埋め合わせるかのように、読書や生き方、社会批判を扱う「人生雑誌」が広く読まれ、青年団・青年学級ではしばしば読書会が開かれていた¹。かつての戦争への疑問から、生き方や社会を彼らなりに考えようとするむきもあった。そこには「教養」（的なるもの）への社会的な憧憬があった。

戦没したエリート学生たちを扱った「わだつみ」（遺稿集・映画）は、そうした「教養」のシンボルでもあった。遺稿集や映画における哲学・思想への言及は、オーディエンスの「教養」への憧憬を再確認させ、「教養」を奪われた学徒たち、ひいては国民の悲哀と、こうした事態を招いた軍・政治の指導者への憤りを掻き立てた。

戦前派知識人への違和感

もっとも、「わだつみ」ブームへの違和感も見られないではなかった。とくに、年長の知識人たちは、戦没学徒の記述について、その教養の「浅さ」をしばしば指摘していた。今日の眼からすれば、『きけわだつみのこえ』での記述はとて「無教養」には見えないし、むしろ、田辺元やカントといった哲学者への深い関心が感じられる。しかし、当時の年長知識人には、そうは見えなかった。

彼らは世代区分としては、戦時期より前の時代に精神形成を果たした戦前派に属しており、大正デモクラシーの時期に、西洋の自由主義・社会主義・マルクス主義にも広く親しんでいた。それに対し、終戦を20歳前半で迎えた戦没学徒たち（戦中派）は、物心ついた頃には満州事変が勃発しており、中等教育を受ける頃にはすでに日中戦争が始まっていた。戦時体制下で青春を過ごした彼らには、自由主義や社会主義にふれる機会はほとんどなく、年長世代に比べれば西洋の古典を手取る機会は限られた。こうした教養体験の相違を、戦前派知識人は「わだつみ」に感じ取っていた。折しも朝鮮戦争が勃発し、日本でも再軍備や憲法改正、徴兵制復活が議論されつつあったなか、「センチメンタルで浅い教養に止まるのではなく、そこからどのように反戦を導くのか」「それを構想するための社会科学的な素養に欠けるのではないか」という思いが、年長知識人には見られた²。

だが、そもそも戦後になって「反戦」を語ることは、戦時期の自らの言動を覆い隠そうとするものでもあった。学生たちはもちろんのこと、知識人・文化人であっても、戦時期に戦争賛美の文章を綴ったり、日本主義の運動に肩入れする者は少なくなかった。一般国民も、町内会や婦人会、青年団等を通して、戦争遂行に積極的に協力していた。にもかかわらず、戦後になって彼らは、これらの過去がなかったかのように「反戦」を叫びがちだった。撃沈された戦艦大和に乗り組み、奇跡的に生還した元学徒将校の吉田満は、こうした状況への批判を以下のように記している。

戦争中のわが言動の実態を吐き出すのではなく、逆に戦争にかかわる一切のものを否定し、自分を戦争の被害者、あるいはひそやかな反戦家の立場に仕立てることによって、戦争との絶縁をはかろうとする風潮が、戦後の長い期間、われわれの周囲には支配的であった。³

それは、戦後日本の「反戦の正しさ」の問題点を鋭く衝く指摘だった。「反戦」はときに、「聖戦の正しさ」を叫んだ往時の言動から目を背けさせ、責任の自覚から遠ざけるものでもあった。

「反戦の正しさ」への懐疑

この種の「反戦」への違和感は、1950年代前半のメディア文化にも投影されていた。1952年6月には、白鷗遺族会編『雲ながるる果てに 戦歿飛行予備学生の手記』が刊行され、翌年には、これを原作にとった同名映画が公開された。「わだつみ」ほどではないにせよ、この遺稿集・映画はともに話題になったが、そこに通底していたのは、学徒兵たちの「純粋さ」だった。学業を断ち切り、恋人と別れ、自らの命が奪われることに苦悶しながらも、戦友とともに死地に赴くことを潔く受け入れる。こうした人物像が、それらには浮かび上がっていた。それは、戦争への憤りが強調された「わだつみ」とは異質だった。

こうした戦争描写が可能になるうえでは、GHQの占領終結が大きかった。サンフランシスコ講和条約が1952年4月に発効し、占領統治が終了すると、それまで抑え込まれていた旧軍懐古やアメリカ批判、東京裁判批判の言説が噴出した。学徒兵や特攻隊員の「純粋さ」が見出されたのも、一面ではこうした流れによるものであった。

とはいえ、それは「なぜ人々は戦争に反対しなかったのか」について、思考を促すものでもあった。「わだつみ」では、高等教育を受けた学生たちの「反戦」の心情が描かれていたが、実際には必ずしもそうだったわけではなく、旧制高等学校や帝国大学に通うトップエリート学生のあいだでも、日本主義的な学生運動は盛り上がりを見せていた⁴。漢口陥落（1939年）や真珠湾攻撃（1941年）の際には、人々は「戦果」に歓喜し、その後も戦争協力を積極的に拒む姿勢はさほど見られなかった。

映画『雲ながるる果てに』の監督を務めた家城巳代治は、「私は特攻隊のはるかうしろで、彼らに拍手をおくった人間の一人だ」「私は少なくとも反協力者ではなかった。寧ろ協力者のつもりだった」と語ったうえで、「われわれはだまされていた」という見方への拒否感を綴っていた。「だまされたとは何という恥ずかしい言葉であろう。もし私がだまされたとするならば、私はだました人間に何等の憎悪もない。唯々だまされた自分への嫌悪があるだけである」という記述には、戦争遂行を支えた自分自身、ひいては国民そのものを問いたたそうとする意志が浮かび当たっていた⁵。「純粋さ」への着目は、一面では、「反戦の正しさ」に肩入れすることで見過ごされがちな、戦時期の国民の「責任」を問おうとするものでもあった。

世代間の断絶

しかしながら、こうした視角はその後のメディア文化のなかで、さほど深められることはなかった。むしろ1960年代に入って表面化したのは、戦争体験をめぐる世代間の断絶だった。

最も多く戦場に駆り出された戦中派世代は、「戦争体験の語りがたさ」にこだわる傾向があった。軍隊内の暴力にさらされたことに由来する憎悪や恥辱の念ばかりではなく、戦地での蛮行をなした日本軍の一員であったことや戦友を見捨てて逃避行したことへの自責・悔恨・鬱屈も大きかった。こうした整理しがたく、また言語化困難な情念のゆえに、戦争体験をわかりやすく、あるいは心地よく語ることに激しい抵抗感を抱きがちだった。

1960年代の社会状況は、その思いをいっそう強固にした。1960年には日米安保条約改定への反対運動が盛り上がり、批准前日の6月22日には全国で620万人がデモに参加するなど、戦後最大の市民運動となった。岸信介政権の強権的な国会運営への反感に加えて、日本が再び戦争に巻き込まれるかもしれないという懸念が、運動の高揚を生み出していた。当然ながら、かつての戦争体験は60年安保闘争に結びつけて語られがちだった。しかし、戦中派世代は、その時々の政治状況に戦争体験を流用するような議論のあり方に、不満を募らせていた。それは、戦争体験のある部分を都合よく利用し、それ以外の部分を切り捨てることにほかならなかった。その後、ベトナム反戦運動や沖縄返還問題、70年安保闘争が盛り上がりを見せたときにも、戦中派文化人は同様の反応を示していた。

それに対し、若い世代は反感を抱きがちだった。学生政治運動にコミットしていた彼らにしてみれば、戦中派世代の言動は、若い世代の運動の意義を否認するものであった。また、「語り難さ」にこだわる戦中派の姿勢は、戦場体験を振りかざしているように思われた。戦争体験を持たない若い世代は、体験者である戦中派世代に対して、どうしても劣位に置かれてしまう。そのことへの苛立ちを、若い世代は募らせていた。

それは、教養主義の論理にも通じるものがあつた。教養主義が「古典の読書を通じた人格陶冶」であるだけに、そこでは古今東西の古典を多く読み込んできた年長知識人が、若者たちに対して圧倒的に優位に立っていた。前述の戦前派知識人が戦没学徒の「教養の欠如」を指摘したのも、そのゆえである。それと同じく、「戦争」が話題になる場においては、厚い体験を有する戦中派は、体験を持たない若者に対して優越的な位置にあつた。

若い世代が、こうした戦中派の態度に不満を募らせたのは、当然だった。彼らは、戦中派世代を交えた会合などのなかで、しばしば、往時の体験に閉じこもるかのような戦中派の姿勢を不毛なものとして批判した。1969年のわだつみ像破壊事件（『きけわだつみのこえ』の刊行を記念して、立命館大学に建立された像を、学生たちが引きずり倒した事件）は、そのことを象徴していた。

もっとも、それでも戦争大作映画はしばしば大ヒットし、若い観衆も少なくはなかった。だが、そのなかには、兵士の壮烈さや悲壮美から距離を取る作品も少なくなかった。たとえば、1968年の年間興行成績（日本映画）第7位を記録した特攻隊映画『あゝ同期の桜』は、製作・配給映画会社である東映の意向もあって、任侠やくざ映画のスター俳優を多く起用せざるを得なかったものの、ラストは、米軍の艦砲射撃で特攻機が次々に撃ち落されるシーンで締めくくっていた。戦中派の下の世代にあたる監督・中島貞夫も、「ゾロっとした戦中派ののろけ話が、大手をふってまかり通るようになった」状況への反感として、「死」を飾り立てるのではなく、その「無意味さ」（および、そうした状況を生み出した社会への批判）を強調していた⁶。

「被害者意識批判」

戦中派に対する不快感の延長で見出されたのが、「被害者意識批判」だった。若い世代は、戦中派世代の「被害者意識」をしばしば批判し、戦中の「加害」を直視しない姿勢を問いただした。日本戦没学生記念会（『きけわだつみのこえ』刊行を契機に1950年に設立された反戦運動団体）のシンポジウムでも、戦中派文化人が糾弾されることは珍しくなかった。

戦中派世代が戦場体験を有するということは、直接的に手を下したかどうかはさておき、さまざまな「加害」をなした日本軍の一員であったことを意味した。それに対して、戦場体験を持たない若い世代は、必然的に戦場での「加害」の経験を持たなかった。「被害者意識批判」という論点は、戦争体験をめぐる戦中派と若い世代のヒエラルヒーを反転させ、戦中派に対する優位を導くロジックでもあった。

もっとも、この社会背景として、ベトナム戦争のインパクトを見過ごすべきではない。米軍による北部ベトナム空爆の様子は、新聞やテレビで大々的に報じられたが、その米軍は沖縄や佐世保から多く出撃していた。そのことは、ベトナム戦争をめぐる日本の「加害」を意味した。また、ベトナムでの空爆は、太平洋戦争末期の日本の空襲体験を連想させたのと同時に、旧日本軍による東アジア地域への侵攻をも思い起させた。その意味で、ベトナム戦争は戦時期および戦後の日本の「加害」を、人々に突き付けるものとなった。戦中派世代の「被害者意識」や「加害」に対する批判も、一面では、こうした文脈から見出されたものだった。

ちなみに、戦後日本映画のなかで、それまで「加害」への着目がなかったわけではない。市川崑監督『野火』（1959年）では、フィリピン戦線下、食糧を探していた日本兵が現地住民を射殺するシーンが描かれていたほか、現地女性兵士の日本兵に対する凄まじい憎悪も映し出されていた。だが、それを除けば、映画における「加害」の直接的な描写は少なかった。むしろ、その問題を回避するかのようになり、日本海軍の海戦や特攻作戦が多く扱われた。陸戦とは異なり、海戦や空戦であれば、「人」（敵兵・現地住民）への暴力を直接的に描く必要はなく、あくまで軍艦・戦闘機といった「機械」の描写を中心に据えることができる。『連合艦隊司令長官 山本五十六』（1968年）をはじめ、1960年代に大ヒットした戦記映画は少なくないが、その多くは日本海軍による海戦や空戦を扱っていた。こうした主題は、「加害」「暴力」にふれずにすむ（ように見える）ものだった⁷。だが、時を同じくして、「加害」から目を背けるかのような議論のあり方が、問われるようにもなっていた。それは、先にも述べたように、戦争体験をめぐる世代間の断絶とベトナム戦争のインパクトによるものでもあった。

自己への問いと顕彰の拒絶

「加害」「責任」をめぐる問いは、若い世代ばかりではなく、戦中派世代の議論のなかにもしばしば見られた。レイテ海戦で沈んだ戦艦武蔵に乗り組んでいた渡辺清は、終戦後、天皇がマッカーサーと並ぶ新聞写真を見て、死んだ戦友を裏切ったかのような天皇の振る舞いに激しい憎悪を抱いた。そのことが、1960年代以降、渡辺が天皇の戦争責任を迫及する契機となった。だが、渡辺は天皇を問責するばかりではなく、天皇への崇拜の念から海軍を志願し、進んで戦争に協力した自分自身をも問いただした⁸。天皇をはじめとする国家指導者のみを指弾して自らを免責するのではなく、彼らの言動を信じ、率先して戦争に参加した末端の個々の国民の責任が、そこでは問われていた。

さらに言えば、渡辺の議論は「自らが犯したかもしれない罪」をも問うものであった。渡辺は自伝的なエッセイ『砕かれた神—ある復員兵の手記』（1983年）⁹のなかで、復員した地元の農民が占領地での暴虐を誇らしげに語っていたことを批判しつつ、「同じ場に居合わせたら自分自身も同じ暴力を振るわなかったと言い切れるのか」を自問自答していた。渡辺の議論は、自らの直接的な行為をめぐる責任ばかりではなく、状況次第では自らも犯したであろう暴力にまで及んでいた。

このことは、暴力を生み出す構造そのものへの問いにもつながる。そもそも、兵士たちにしてみれば、「悪虐」という認識を抱いて暴力を振るったというよりは、むしろ、暴力が「悪虐」なものに見えない、さらに言えば「正しさ」さえ帯びる状況があったのではないか。兵站を無視した作戦遂行、戦果にはやる上官たちの出世欲、合理的な判断よりも攻撃的な姿勢を尊ぶ軍上層部——こうした軍の組織風土が、末端の兵士たちに無謀な行軍を強制し、彼らを自暴自棄に追い込むことは少なくなかった。戦車兵として動員された作家・司馬遼太郎は、戦国期や幕末・明治期を扱った歴史小説のなかで、昭和陸軍の歪みをたびたび物語に重ね合わせていた¹⁰。「自らが犯したかもしれない罪」を自問した渡辺清の議論も、それを突き詰めれば、暴力と破綻を招いた軍や政治の組織病理の問題に行き着くものでもあった。

こうした問題意識は、死者の顕彰への拒絶にもつながった。

1960年代半ばから1970年代前半にかけて、靖国神社を国営化し、国が公的に戦没者を顕彰することをめざす動きが、日本遺族会や自民党保守派を中心に広がりを見せていた。これに対し、メディアや宗教界・教育界は、政教分離が担保されないことや国家神道の再来につながりかねないことから、つよく反発し、結果的に国会で法案が成立することはなかった（靖国国家護持問題）。

戦中派文化人の多くも、この動きに反対したが、その論拠はやや異なるものであった。安田武や橋川文三らは、むしろ、死者を褒め称え、持ち上げることが、軍や国家に対する彼らの憤りを覆い隠し、結果的に死者の口を封じることを懸念した。安田はすでに『戦争体験 一九七〇年への遺書』（1963年）のなかで、『『他人の死から深い感銘を受ける』というのは、生者の傲岸な顔廢』であると語っていた¹¹。それは、顕彰を通して死者の怨念から目を背ける戦後の「生者」の欲望を問いただすものであった。

「顕彰」と「加害」の二項対立

だが、こうした入り組んだ議論は、1980年代以降、あまり見られなくなり、むしろ、「加害（責任）」と「顕彰」の二項対立が前景化するようになった。

靖国国家護持問題が沈静化したのち、日本遺族会や自民党保守派は、首相・閣僚の靖国神社公式参拝に重きを置くようになった。1979年にはA級戦犯合祀の事実が知られるようになっただけに、「戦後40年」にあたる1985年8月15日に中曽根康弘が戦後首相として初めて靖国神社に公式参拝を行うと、国内外からの激しい非難にさらされた。1982年には、日本の大陸侵出に関する歴史記述をめぐる教科書

問題が過熱し、外交問題にまで発展した。

こうしたなか、往時の戦争への評価は、「死者の顕彰」に重きを置く議論と「加害責任」を直視しようとする議論とに二分するようになった。「被害」と「加害」ではなく、「加害」と「顕彰」の二項対立が、そこでは見られた。

かつてであれば、「加害」の問題は「自己への問い」とも結び付き、特定の個人の責任ではなく、暴力を生み出す構造を捉え返そうとする（かすかな）契機も見られた。死者を顕彰する議論に対しては、死者の憤りが覆い隠されることへの懸念も語られていた。さらに言えば、「反戦」「平和」の政治主義が死者や体験者の複雑な心情から目を背けさせ、体験を都合よく利用しかねないことが問われることもあった。だが、これらの論点は1980年代以降にもなると、総じてかすみがちとなり、「顕彰」と「加害」の二項対立ばかりが再生産されるようになった。

時を同じくして、「戦争体験の断絶」も目立たなくなった。戦中派よりも下の世代が、社会的な発言力を有する年代となり、また、戦中派文化人も下の世代からの突き上げに嫌気がさしたのか、戦争体験をめぐる発言はかつてに比べれば目立たなくなった。そもそも、安田武や渡辺清など、1980年代に他界した戦中派も少なくなかった。必然的に、体験をめぐる世代間のぶつかり合いは、ほとんど見られなくなった。

1990年代初頭に冷戦が終結すると、東アジア諸地域では、それまで親米独裁政権に抑え込まれがちだった個人賠償問題が先鋭化し、「戦後50年」という節目も相俟って、日本の戦争責任・植民地責任が従来以上に焦点化された¹²。日本国内では、それに真摯に向き合おうとするメディア言説や市民運動が多く見られた一方で、これらの動きに反発し、戦争責任を否認するばかりではなく、日本の戦争遂行を肯定的に捉えようとする「歴史修正主義」も広く見られた。それは、小林よしのりのマンガ『新・ゴーマニズム宣言 SPECIAL 戦争論』（1998年）などを通して、ポピュラー・カルチャーのなかにも浸透していった¹³。

歴史認識問題は以前にも増してメディアで多く扱われ、書籍も多く刊行された。だが、それでもって「顕彰」と「加害（責任）」の二項対立が解消されるのではなく、むしろそれが強固にされたのが実状である。「加害」の問題を考えようとする者は、「顕彰」を謳う言説にふれることはなく、その逆もまた同様だった。多くの議論が出されれば出されるほど、異なる立場の間でのコミュニケーションが加速されるのではなく、むしろ、両者の相容れなさばかりが拡大再生産される。こうした状況が、冷戦終結以降の日本社会のなかでは際立っていた。

「継承」という断絶

今日の日本でも「戦争の記憶の継承」は多く語られる。ことに、「終戦記念日」の8月のジャーナリズムでは、その傾向が際立っている。戦争体験者の多くが他界し、聞き取りが困難になりつつある焦燥感が、その背景にはある。だが、そこで「継承」しようとしているものは何なのか。そのことを一歩引いて考えてみてもいいだろう。

90年代に見られた歴史認識の二項対立は、その後も消え失せたわけではない。東アジア諸国との緊張関係のなかで、同様の議論の過熱はしばしば見られる。とくにネットメディアでは、その傾向が著しい。歴史認識をめぐるネット言説は膨大な量に及ぶが、それが異なる立場相互のコミュニケーションを促すのではなく、むしろ自らが好む言説ばかりに接触し、異論を受け付けられない状況が再生産されている。これは一面では、「検索」「履歴」に基づく情報接触を促すネットメディアの特性によるものではあるが、1990年代以降の言説空間との連続性も見落とすべきではない。

むろん、歴史認識問題はつねに焦点化されるわけでもない。むしろ、マスメディアでは、「炎上」を避けるかのような当たり障りのない議論も、多く見られる。「顕彰」や「加害」の問題に深入りせず、誰も否認することのない「記憶の継承の大切さ」が謳われることは、このことを暗示している。

だが、そこで「継承」されようとしているものは、さまざまな断絶や忘却を経た上澄みのようなものでもある。「死者の感銘」への抗い、「自己への問い」としての「加害」、暴力を生み出す社会構造への関心——今日のメディア言説において、これらが顧みられることは少ない。むしろ、ある種の「わかりやすさ」が前景化している¹⁴。

しかし、過去の言説に目を向けてみるならば、また異なる議論の存在に気付くことができる。かつて「継承」よりも「断絶」が際立っていた時期もあったが、そこではむしろ、戦争体験や記憶をめぐる多様な論点が浮かび上がっていた。「反戦の正しさ」がときに何を見えにくくしたのか。「加害」を論じることが果たして「他人事」になってはいないか。それはいかなる欲望に支えられているのか。さらに言えば、「加害」を生み出すメカニズムにどう向き合うか。こうした論点は、往時のメディア言説やメディア文化のなかで、しばしば見られた。

むろん、そのことが、歴史認識をめぐる日本と東アジアの「和解」に直結するものではないだろう。だが、今日の議論のありようは、いかなるプロセスを経て生み出されたのか。そこには、いかなる社会背景が関わっていたのか。いかなる論点が失われてきたのか。これらの問いに向き合うことは、今日に自明視されている歴史認識を捉え直すための基礎作業でもある。「継承の歴史」ではなく、「断絶の歴史」「忘却の歴史」に向き合うことで見えてくるものも、あるのではないだろうか。

1 福間良明『「勤労青年」の教養文化史』岩波新書、2020年。

2 福間良明『「戦争体験」の戦後史—世代・教養・イデオロギー』中公新書、2009年。

3 吉田満『「戦艦大和」と戦後 吉田満文集』ちくま学芸文庫、2005年、195頁。

4 井上義和『日本主義と東京大学—昭和期学生思想運動の系譜』柏書房、2008年。

5 家城巳代治「弱者の勇氣」『教育』第186号、1965年、64頁。同「映画芸術家の反省と自己革新に就て」『映画製作』第1号、1946年（南博編『戦後資料・文化』日本評論社、1973年、123頁所収）。

6 中島貞夫「あゝ同期の桜」『映画芸術』1967年5月号。特攻隊を扱った映画・遺稿集など、「特攻」の語りの戦後史については、福間良明『殉国と反逆——「特攻」の語りの戦後史』（青弓社、2007年）参照。

7 吉田裕『日本人の戦争観—戦後史のなかの変容』岩波現代文庫、2005年。戦後日本の戦争映画のなかで海軍が多く扱われたとはいえ、日本海軍による重慶爆撃などは、ほとんど焦点化されなかった。福間良明『殉国と反逆』（前掲）参照。

8 渡辺清『砕かれた神—ある復員兵の手記』岩波現代文庫、2004年。福間良明『「戦争体験」の戦後史』前掲。

9 朝日選書（朝日新聞社）の一書として出された同書は、2004年に岩波現代文庫版として再刊されている。

10 福間良明『司馬遼太郎の時代』中公新書、2022年。

11 安田武『戦争体験 一九七〇年への遺書』未来社、1963年、142頁。

12 この社会的背景については、浅野豊美編『和解学の試み——記憶・感情・価値（和解学叢書1）』（明石書店、2021年）参照。

13 こうしたなか、遺稿集『きけわだつみのこえ』を原作とする映画『きけ、わだつみの声』（新版）が1995年に公開された。ここでは、日本軍兵士によるフィリピン住民の虐殺や、「従軍慰安婦」をめぐ

る問題も扱われるなど、「加害」の論点が織り込まれていた。ただ、暴力への批判的な視座の一方で、渡辺清が提起した「自らが暴力を犯す当事者になるかもしれない」ことへの危惧が描き込まれていたとは言い難い。そのことは、暴力を正当化（自明視）した社会構造への問いが後景化していることを暗示していた。福間良明『「戦争体験」の戦後史』前掲。

¹⁴ 「継承」の無難さが内包する問題性については、福間良明『戦後日本、記憶の力学—「継承という断絶」と無難さの政治学』（作品社、2020年）参照。

■福間良明（ふくま・よしあき／FUKUMA, Yoshiaki）

1969年、熊本市生まれ。1992年、同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。出版社勤務を経て、2003年、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士（人間・環境学）。香川大学経済学部准教授を経て、現在、立命館大学産業社会学部教授。専門は歴史社会学・メディア史。

主な著作：『「戦争体験」の戦後史—世代・教養・イデオロギー』中公新書、2009年。『戦後日本、記憶の力学—「継承という断絶」と無難さの政治学』作品社、2020年。『司馬遼太郎の時代—歴史と大衆教養主義』中公新書、2022年。